

[芸術教育記録]

## 2013年度パフォーマンス・アーツ学科一年生宿泊研修報告

### 2013 Report on the Performing Arts Field Trip Seminar for the First Year Students

小佐野 圭\* 松村悠実子\*\*

Kei Osano and Yumiko Matsumura

#### 1. はじめに

パフォーマンス・アーツ学科では、昨年に引き続き今年も九月に一年生宿泊研修を行った。「パフォーマンス・アーツとは何か」という命題を探求すべく学生自身、自らの専門分野について考えることに比重を置いた研修を行った。演じる側と観る側、あるいは聴く側、そして作品を創る側が、どのような関わり方をするのか、宿泊研修という形を生かして実施した。

パフォーマンス・アーツ学科の大きな二つの柱：「演劇」と「音楽」に触れられる様、一日目には演劇分野から「狂言」の観劇、音楽分野から「ピアノソロとテノール独唱の演奏会」の鑑賞を行った。また二日目には、前日の観劇・鑑賞を踏まえて「パフォーマンス・アーツとは何か」を議題としてグループディスカッションを行った。最後にはレポート「この研修を受けて思考したこと」を書き、研修のまとめとした。また、今年は今後の学修とその先のキャリアをつなげることを目的として「キャリア」についての講義を二日目に実施した。

#### 2. 研修概要

##### 到達目標

芸術への意識と価値観を高め、今後、自らの学習へ意欲を示すことが出来る。また、他者に自分の考えを伝えることが出来る。

##### 評価

研修2日目において、グループディスカッションを行う。「パフォーマンス・アーツとは何か」というテーマで議論をする。最終的には各自がレポートをまとめ、内容を検証する。

---

所属：\* 玉川大学芸術学部教授  
\*\*玉川大学芸術学部助教

受領日 2013年11月30日

## 目的

日本古典芸能の知識を得ると同時に、横浜能楽堂の舞台に立つという体験を通して、芸術空間を体感すること。また、演奏会を通して、ピアノ独奏及び声楽独唱を鑑賞し、作曲家・作品の本質に触れること。この二つの公演を通して、「パフォーミング・アーツとは何か」について考えること。

## 実施概要

日 時：平成25年9月17日（火）～18日（水）

場 所：観劇：横浜能楽堂 鑑賞：ローズホテル横浜 宿泊：ローズホテル横浜  
(2階ザ・グランドローズボールルーム)

参加者：平成25年度 パフォーミング・アーツ学科 一年生

## 参加教員

学科主任：太宰久夫／担任：小佐野 圭、松村悠実子、松川 儒、馬場眞二／

教務担当：中村岩城、高須 一／助手：須藤未来、都甲英里

## 実施内容

一日目は人間国宝 茂山千之丞氏長男である狂言師 茂山あきら氏（ほか4名）を招聘し、横浜能楽堂にて「蚊相撲」「濯ぎ川」を演じる。また、バックステージ体験を通して、舞台に乗り、身体を通して現場を学ぶ。また、芸術系の現場で活躍しているパフォーミング・アーツ学科の卒業生であるピアニスト林京平氏&歌手芦田瑞樹氏を招聘し、演奏会を行う。演奏曲目はベートーヴェン、ラフマニノフ、ベッリーニ、トステイ等の作品である。二日目は「キャリアについて」というテーマで講義を行う。また「パフォーミング・アーツとは何か」というテーマでグループワークを実施する。

## 演目内容

### (1) 狂言

日時：平成25年9月17日（火）開演13時半 場所：横浜能楽堂

出演：「蚊相撲」大名：茂山宗彦 太郎冠者：増田浩紀 蚊：茂山童司 後見 茂山あきら

「濯ぎ川」夫：茂山あきら 女房：増田浩紀 姑：丸石やすし

- 1 はじめに（太宰久夫）
- 2 解説（茂山あきら氏）
- 3 「蚊相撲」  
休憩（10分）
- 1 「濯ぎ川」
- 2 バックステージツアー

### (2) サロンコンサート ～音楽の贈り物～

日時：平成25年9月17日 開演20時 場所：ローズホテル横浜(2階ザ・グランドローズボールルーム)

演奏：ピアノ・ソロ 林 京平 テノール独唱 芦田瑞樹（ピアノ伴奏 佐藤佳織）

林 京平（ピアノソロ）

□ソナタ第16番ト長調 作品31-1第1楽章 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン



#### 4. 学生からのレポート（抜粋）

- ◇「芸術は時代を超えて生き続ける」ということである。時代背景に大きな差があったとしても、人が感じる「楽しさ、皮肉さ」等の感情は昔も今も変わらないであろうと考えた。コンサートに関しては「感性」については共通点が昔と現代の間にあるのではないかと感じられた。芸術は国や時代を超えて全ての人々に感動をもたらすものだと考えられる。その感動をより多くの人に伝えるために演じ手や奏者は発表する直前まで作品について探求を惜しまないのだろうと今回の鑑賞で感じた。
- ◇今回の研修に参加して、自らが所属するパフォーマンス・アーツについて深く考える機会となったように思う。以前、能・狂言を鑑賞したことはあったが能楽堂に入ったことはなく初めての体験であった。能楽堂は5.4m以上の本舞台、はしがかり、象徴とも言える松羽目があり、かめが床に敷き詰められているために音がよく通ること、お面をかぶると声がこもってしまうために反響版がつけられていることなど、多様な工夫を体験できた。（略）約600年以上前から行われていた能や狂言は楽しさや悲しさを持つ人間心のバランスを考え上演されていたことを考えるとやはり日本人は偉大だと感じる。夜のミニコンサートでは、演奏して下さった曲の中の物語やイメージというのが歌や音を通して伝わってくるようで、とても快く感動するものであった。演奏者の方々のお話にもあった様に、日々の努力や経験が今に繋がっていることを強く感じた。
- ◇この研修を通して、時代が変わっても観客が良い芸能を観て感じることは変わらないのだと思った。狂言は室町時代から人々に親しまれてきたものらしいが、現在の私たちが観ても思わず声を出して笑ってしまうほど、面白かった。昔の人々が面白いと感じたものが、今の私たちにも通用するのである。まさに時間軸を超えた芸術のすばらしさを感じた。
- ◇研修を通して表現者としてあるべき姿を学んだ。正直に素直に心から笑っている自分がいた。狂言やミニコンサートを鑑賞してパフォーマーの方々とは表情からもオーラからも自信に満ちあふれていた。ディスカッションを通して自分の課題が明確になり、わかった気がした。また、同学年の友人達は皆、しっかりと将来について考えていて、自分は情けないと思った。今も大切だが、もっと大事なことは将来の自分である。自分の将来は自分でしかつくりえないことを考え充実した学生生活を送らないといけないと強く感じた。
- ◇私自身、現代劇ばかり観ていて“狂言”のような日本の伝統芸能の舞台芸術に対して心のどこかで「自分は理解できないのではないかと」思ってしまう苦手意識をもっていた。しかし今回の「狂言」を観て私は「わかりやすさ」に驚いた。（略）観客と作り手の関係性は非常に大切である。どちらも欠けてしまえば成立しないものである。作り手は観客のために、観客は作り手の気持ちに応えるように、狂言だけでなくどのような舞台芸術にも通じることであると思う。昔から続く芸術は現代の芸術を学ぶときに大きなヒントとなることが多くある。そのことが今回の研修を通じて大きく感じたことである。私自身これから先、舞台芸術を学んでいくときに能や狂言など昔から続く伝統的な芸術を学び舞台芸術であるパフォーマンス・アーツとは何かを追求していきたい。
- ◇今回の研修で一番学んだことは「強さ」である。狂言では「力強さ」をミニコンサートでは「心強さ」を感じた。私ははじめて狂言を観た。想像以上にコミカルでリズム感があり、とても驚いた。狂言は喜劇だということをしっかりと自分で確認できた。ミニコンサートではピアノの音と歌手の方の声にとっても癒しを感じた。最後には鳥肌が立ってしまった。
- ◇今回のはじめて狂言を観てまた狂言についての茂山先生のお話を聞いて発見したことは「狂言に使われている舞台に設置されたありとあらゆるもの全てには必ず設置されたことのわけがある」ということだ。例えば舞台の下に敷かれていた白い石にはまだライトなどが存在しない時代に狂言師

の顔がよく見えるようにと工夫されたものだったという。また舞台の壁には鏡板という松の木が描かれた板が貼付けられていた。一見、ただの背景のようにも見えるこの板だが、これは、元々は外で演じられていた能を聞き取りやすくするための反響版だった。このように技術の発達していない時代でも一いや、技術の発達していない時代だったからこそ成された工夫があったのである。狂言や演劇や舞踊や音楽には、より良く聴衆に伝えるための工夫が多彩に盛り込まれている。それは、今も昔も変わらない。自分も芸術に隠された多くの工夫を盗み、技能を発展させ自分の表現したい芸術を表現したい。

- ◇ディスクッションを通して私は「パフォーマンス・アーツとは」を考えたとき「メディア・アーツ」や「ビジュアル・アーツ」には無いパフォーマンス・アーツ特有のものを探した。それは「空間」だと思った。他の二つに比べて一瞬で終わってしまうパフォーマンス・アーツは、まさに空間を使った芸術だと思う。音楽は空気の振動で人を楽しませ演劇は目で人を楽しませる。しかもそれはすぐに消えてなくなってしまうが、聴き終わったり見終わった後、その空間にいただけで、感動の余韻に浸ることが出来る。それをするために本当にたくさんの人がかかわっていて人ありきの芸術がパフォーマンス・アーツなのだと思った。
- ◇「舞台」「一体感」「意思疎通」などのキーワードを中心に演者やスタッフと観客との一体感を学ぶことができた。
- ◇狂言では現在にはないユーモアのセンスを感じた。夜のコンサートでは普段感じるができない安らぎを感じた。伝統の大切さ、演じることの難しさを改めて感じた。
- ◇バックステージでは、舞台裏の楽屋が旅館の畳の部屋みたいで初めて鏡の間や橋掛り、本舞台に足を踏み入れ床がやわらかいことに一番驚いた。また舞台の下に敷き詰められている白い石がフットライトの役割をしていることは初めて知って感動した。夜のコンサートでは先輩方の演奏を聴き音楽を始めたきっかけを聞いたが、林さんが言っていた「何か一つ得意なものを手に入れたかった」という言葉が印象的だった。自分も昔からそう思っていたのに、結局何も継続できなかったから、先輩方は本当に目標をしっかり持って今まで努力してきたんだと非常に尊敬した。同じパフォーマンス・アーツ出身者として自分も卒業後に何か結果を残せていけたら良いなと思った。この2日間は非常に自分にとって刺激のある良い研修だった。
- ◇狂言もクラシック音楽もどの時代でも人間が感じて良いと思う感覚は同じなんだということである。人間が面白いと感じることは、世間の風潮などによって変わるところがあるとは思いますがその根底にある面白いと感じる感覚はいつの時代でも変わらないと考えた。
- ◇「交流」はこの研修で感じたことをまとめたキーワードである。「交流」という言葉の中に様々な意味を持たせたいとわたしは思う。役者同士の交流、役者とスタッフの交流などはお互いに多少の意見の相違はあっても同じ作品を一から創り上げていくために必要な仲間の交流だ。(略)最後に自分自身との交流だ。自分自身との交流が一番長くかかる交流である。手間も忍耐も必要な交流となる。辛いことを乗り越えた自分を自分自身で成長させていくのである。これが私が考える「交流」だ。

## 5. まとめ

学生の感想を分析してみると、この研修は学生にとって、有意義な時間であったことが伺える。学生達が入学してから半年経過した九月という時期は、仲間とのコミュニケーションも積極的となり、大学で学ぶ意義をより現実的なものとして捉えることができるようになっている時期である。この時

期において研修を実践したことは自らの目標に向かっていく学修のステップとして、大変、意義があったように思う。ディスカッションにおいて、自分や他者の考えを聴きながら、議論したことは芸術を理論的に構築する上で大切なことだという認識もできた。また、自分の考えを他者に伝えるという到達目標にも繋がることのできた。演技あるいは演奏する動きを観ること、聴くことは芸術の中身を認識する力を養うために、いかに重要であるかということが認識できた。今後も継続して彼らの課題として芸術作品における「観る力」「聴く力」を養っていくことが、不可欠であろう。

しかしながら、ディスカッションにおいて学生全員が積極的な意見交換が十分に出来たか、充実したか、という問題は、疑問が残る。今後、ディスカッションを行う場合、芸術作品についての十分な下準備が必要であり今後、我々教師も、検討していかなければならない問題である。

最後に、彼らが、この研修で感得した「心」や「知識」が自らの専門の能力を高めて、芸術学部のミッションである芸術活動を社会貢献に繋げていくことを願う。



一日目ミニコンサート 卒業生の演奏



一日目 横浜能楽堂におけるバックステージ体験